

いまの教育に行なわれているムダ

字形について認識の足りないうちから、漢字を書かせますと、一点一画ごとに、手本の漢字を見比べなければなりません。複雑な漢字になりますと、どこまで書き写せて、どの画がまだ書けていないかさえ、わからなくなります。

そんな書き方をしていたのでは、何十回書いたって、書けるようになるはずがありません。それは、まだ、ほうことも立つこともできない赤ちゃんに、立って歩くけいこをさせているようなものです。むりです。歩けるようになったとしても、足が曲がってしまい、けっきょく、「歩く力」は正常な発達をすることができなくなってしまいます。

いまの国語教育では、時間をかけて、子どもに無益の苦勞をさせて、「漢字を書く力」をさまたげる教育をしているのです。

はいはいしていた赤ちゃんが、立てるようになってから歩かせることを始めるように、漢字が読めて、意味もよくわかり、使い方もよくわかり、目をつむっても、その漢字の全休の形が頭の中に描かれるように

なってから、書く指導を始める、というのが石井方式の書き方です。

頭の中に一瞬のうちに書ける漢字を、実際にはどのように、どんな順序で書くのかを教えるのです。ですから、子どもたちは、一点一画、手本と見比べて書く必要はありません。それは、機械的な無意味な仕事ではなくて、はつらつとした表現活動です。いままでの十分の一、二十分の一の時間と労力で、いままでよりずっと価値の高い、りっぱな漢字を書くようになります。これはもうあたりまえのことです。

「人が来ました」を、「火とが木ました」と子どもが書くのは、立てないうちに歩かせたから、足が曲がってしまった、ということなのです。石井方式では、「火とが木ました」などと書くような子どもは、絶対におりません。